

親鸞聖人の願われた

浄土を聞こう

●池田勇諦

〔「なじやごぼう」〇八年二月号〕

親鸞聖人の開顕された浄土真宗は、その名のごとく往生**浄土**という**眞実**を人生の**宗**とする道である。だが、その浄土が今日もつともわからないものとなっている。そこには私たちの体質的なアニミズム（有靈観）による浄土の他界観、往生の転生観、浄土の死後観が……。思えばそれは人間の極めてプリミティブ（原始的）な宗教心にちがいないが、その無明性を自覚的に突き抜けて、万人成仏の本願

の仏道を開顕した親鸞聖人の浄土の教えの前には、回入（えにゆう）の否定的契機となるほかはない。

眞の居場所を開く本願

では、浄土は現世なのか、否。浄土は私たちのうえに現世とか、来世とかという自我の分別心を打ち破つて、眞に去（こ）・来（ら）い・現（げん）を超えて貫く眞実の現在として現働する国土である。その点、聖人の浄土理解の基本語が「報土（ほうど）」であることに如実である。「大悲の誓願に酬報（しゅうほう）するがゆえに、眞の報土と曰（い）うなり」（『眞宗

聖典』三〇〇頁）と。つまり如来の本願は私たちのうえに国土として自己を表現する。それは形なき本願の形化として、願心を私たちに報（し）らせる「無上の方便」にほかならない。ならば、いかなる願心か。国土を喪失して生きる私たちのために、眞の国土、居場所と成ろうという悲心でないか。それが「光寿無量（こうじゅむりょう）」の願心として、どこでも照らすはここに極まり、いつでも寄り添うはいまを離れない。

いまが一番いい時

いまが一番大事な時

ここが一番いい処

ここが一番大事な処